

生き通しなり スピノザの神と宗忠の神

山 崎 好 裕*

はじめに

黒住宗忠が信仰した天照太神は日本神話上的人格神であり、宗忠はそれを一種の絶対神として特別視したのであるから、内在と超越の二分法で言えば、超越神ということになる。だが、同時に、宗忠は天照太神をこの天地自然に充満する生命のように捉えて、汎神論的な神観を強固に示している。その点から見れば、宗忠の神は内在神である。

ここから想起されるのは、西洋的な超越神と東洋的な内在神を統一し、止揚するものとして西田（一九四五）が提示した内在的超越、あるいは、超越的内在といった用語法である。しかし、こうした矛盾する概念の結合は西田幾多郎のお家芸ではあるものの、端的に無意味である。

本稿では、そのような京都学派的な語法に安易に従うことなく、黒住宗忠の神観を概念的に明確化していくことを目的としている。その際、参照枠として利用されるのは、スピノザ（一六七七）に見られる神観である。また、バールーフ・デ・スピノザと黒住宗忠の神概念を比較することは、両者の信仰とその恩寵の在り方に関しても顕著な類似性を確認することにつながるは

*福岡大学経済学部

ずである。

スピノザの徹底した汎神論はその合理的な構成と相俟って、無神論者としての破門へと繋がってしまった。しかし、結果として中世的な宗教的世界観を根底から近代科学のそれへと転換させたのであった。そして、神即自然の全てが合理性の光に照らされることになり、その後の近代経済発展を促す道を拓いたと言っても過言ではない。

本稿で審らかにするように、日本近代を目前にした幕末の黒住教の神観がスピノザのそれと相即するものであるとすれば、やはり、日本における宗教の合理化にそれが寄与し、結果として近代産業の発展に繋がる精神的原動力になったという仮説も根拠なしとはしないだろう。

一．スピノザの神

スピノザ（一六七七）の第一章は「神について」である。『エチカ』はスピノザがほぼ完成された形で遺稿として残したものであるが、哲学的諸命題を徹底して幾何学的証明によって導出しようとしている。その場合、神の存在は前提あるいは定義ではなく、定理として導かれることになる。

スピノザの神の定義は「絶対に無限なる実有、言いかえればおのおのが永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性から成っている実体」¹ というものである。この定義のなかで、「属性」と「実体」という言葉が使われているわけだが、前者の定義は「それ自身のうちに在りかつそれ自身によって考えられるもの」²、後者の定義は「知性が実体についてその本質を構成していると知覚するもの」と³ なっている。スピノザは、知性的な推論に関するい

¹ スピノザ（一六七七） 翻訳上巻三八ページ。

² 同上、三七ページ。

³ 同上。

くつかの公理を確認した上で、神について語るべくいくつかの定理を導出していく。まず、異なった属性を有する二つの実体は相互に共通点を有しない。そうであれば、共通点のない二つの実体はお互いにお互いの原因ではありえない。また、同一属性を有する二つの実体は存在しない。なぜならば、多数の実体はその属性によってしか区別されないからである。さらに、すべての実体は必然的に無限である。なぜならば、有限であれば、その実体は同じ属性を持つ他の実体によって限定されているはずだが、それは上記の定理と矛盾するからである。

このような推論によってスピノザが何をしようとしているかは明らかであろう。スピノザが定理として導いた実体というものは、唯一のものであり、自分自身が自分自身の原因になっているものであり、一切の変化を被らない永遠のものである。そして、そうした唯一の実体は、スピノザが最初に定義した神と重なる。つまり、スピノザは神または自然がそうした実体であることが証明できたと主張しているのである。

とても気になるのは、スピノザが「実体の本性には存在することが属する⁴」という定理をも導いてしまっていることである。もちろん、スピノザは、だから、神は必然的に存在する、とやってしまう。これだと悪名高い、神の存在の本体論的証明になる。そこでは、本質存在（エッセンシア）と現実存在（イグジステンシア）が区別されていない。神が存在という属性を持っているということは本質の話であって、実存を保証するものではないのである。

スピノザの議論の長所は陳腐な存在証明を繰り返したことでは全くない。繰り返すが、スピノザがよいのは、神または自然がこの世の唯一の実体であることを証明したからである。そして、スピノザは決定的な定理を導出する⁵。

⁴ 同上、四二ページ。

⁵ 同上、五三ページ。

すべて在るものは神のうちに在る、そして神なしには何物も在りえず
また考えられえない。

スピノザは「神に酔える哲学者」と呼称されるが、その真面目がここにある。つまり、スピノザのようにこの世のすべてを神と名付けてしまえば、それが存在するかしないかはもはや論理の問題ではないとも言える。この世とそのなかにある万物が存在しないという人がもしいれば、間違いなく狂人と見なされるであろう。

先に述べた内在と超越ということについてもスピノザは実に明快である。スピノザによれば、「神はあらゆるものの内在的原因であって超越的原因ではない⁶」。既に見たように、神は唯一の実体であるのだから、神以外にいかなる実体も存在しない。神がこの世の超越的原因であるならば、その神は神自身の外にいなければならないのだから矛盾である。個物は神の属性の変状、あるいは、神の属性を一定の仕方では表現する様態であるのだから、そういう意味で神は個物の原因である。以上のことから、神はこの世の内在的原因であることが導かれる。

この世には神という唯一の実体しかない。とすれば、我々人間の精神もまた神という実体の一つの態様である。いくつもの態様を我々の精神というかたちで示すような神の属性を、スピノザは思惟と呼んでいる。もちろん、ルネ・デカルトが二つの実体とした精神と物体のうち、後者の属性である延長も、スピノザの場合は神の属性の一つである。それにしても、スピノザの考えでは、我々の精神が何かを主体的に考察するのではなく、言わば神が我々の内で思索しているのだということになるが、スピノザ自身が書いているように、「ここで読者は疑いもなく躓くであろう⁷」。まずはスピノザの説明を確

⁶ 同上、六四ページ。

⁷ 同上、一〇七ページ。

認しておこう⁸。

この帰結として、人間精神は神の無限な知性の一部である、ということになる。したがって我々が「人間精神が^{このことあるいはかのこと}を知覚する」と言う時、それは、「神が無限である限りにおいてでなく、神が人間精神の本性によって説明される限りにおいて、あるいは神が人間精神の本質を構成する限りにおいて、神が^{このことあるいはかのこと}の観念を持つ」と言うのにほかならない。また我々が「神が人間精神の本性を構成する限りにおいてのみでなく、神が人間精神と同時に他の物の観念をも有する限りにおいて、神が^{このことあるいはかのこと}の観念を持つ」と言う時に、それは「人間精神が物を部分的にあるいは非妥当的に知覚する」という意味である。

人間精神が極めて限定的であり、かつ、過ちが多いことは、我々自身がよく知っている。それなのにスピノザは、それは神の思索であると言う。神の思索であるならば、すべてのことに通じており、過ちなど犯さないのではないだろうか。スピノザはどうやってこの矛盾を説明しようというのであろうか。スピノザの説明はそれが部分的であるからというものである。全体性が完全を意味するのに対し、部分性は不完全さを意味している。神が構成しているのは人間精神すべてに共通する本質であって、個々人の精神は相対的に独立して個々人に属している。だから、人間精神全般については神が思索していると言えるのだが、個々の精神についてはそう言えないのである。それでも、神の思索は万物についての思索であるから、それは全知全能でなければならぬのではないだろうか。ここでも理由は部分性である。神はすべてを把握できるが、人間精神はそれを部分的にしか把握できない。そのため、

⁸ 同上。

人間精神は不完全なのである。

精神はその向かう先がこの世の事物であるから、人間精神を構成する観念の対象は自身の身体と「現実に存在するある延長の様態」⁹、すなわち、物質であってそれ以外にはない。だから、スピノザはここで、観念についての観念ということを否定し、すべての観念は物質世界を対象としているものだということを言っていることになる。人間にとって身体は自らが根源的に所有する物質であるから、スピノザは「人間は精神と身体とから成りそして人間身体は我々がそれを感じずるとおりに存在する」という系を導いている。彼は精神と身体は完全に一体のものだと言いたい。そして、神を唯一の原因とするあらゆる個体は人間と同じように精神を持っているはずである。もちろん、人間以外の生物や無生物など、その精神には種々の段階はあるであろう。それでも、こうした個体観は同時代で面識もあつたゴットフリート・ライプニッツのそれと極めて類似していると言わざるをえない。

先に、スピノザが観念についての観念を否定していると述べたが、後に彼はそれらが存在していることを確認する。そして、それはやはり、まず神からやってくる¹⁰。

人間精神についても神の中に観念あるいは認識がある。そしてこの観念あるいは認識は、人間身体の観念あるいは認識と同様の仕方ですべての神の中に生じ、また同様の仕方ですべての神に帰せられる。

この世のあらゆる事象は神の変状であるから、物質世界も精神世界もすべては神のうちに生じる。それらについて、神は思索するはずであるから、人間精神についても神のなかに観念が生じるということになる。このことは、

⁹ 同上、一〇八ページ。

¹⁰ 同上、一二五ページ。

人間精神もこの世の事象であるということの意味し、したがって、人間精神が他の人間精神、および自己の人間精神を知覚することができることが帰結する。我々は既に、人間精神が身体を対象とするものであることから精神と身体的一致を導いたのであったから、同様に精神についての観念も精神自身と一致しているのでなければならない。

神は唯一絶対の内在的原因である。神のみが自存する本源的理由である。逆に言えば、人間は自己の存在についても、自分の行動についても原因とはなれない。つまり、人間は自由意志を持たない¹¹。

精神の中には絶対的な意志、すなわち自由な意志は存しない。むしろ精神はこのことまたはかのことを意志するように原因によって決定され、この原因も同様に他の原因によって決定され、さらにこの後者もまた他の原因によって決定され、このようにして無限に進む。

自由意志が否定されることは、スピノザによれば、もちろん、証明可能な事柄である。だが、『エチカ』はその書名の通り、倫理、さらには生き方の問題を解明しようとした書物である。スピノザは自由意志の否定がもたらす我々の生き方の変容について、その効用を詳細に述べようとするのである。何よりも、それは我々に宗教的な至福感をもたらしてくれるのだとスピノザは言う。自由意志が否定されたとき、我々は自身が「神の命令によってのみ行動し・神の本性を分有する者」¹²であることを自覚できる。そして、「徳そのもの、神への奉仕そのものがとりもおさず幸福であり・最高の自由であること」¹³を知ることができる。

¹¹ 同上、一五二ページ。

¹² 同上、一六二ページ。

¹³ 同上、一六三ページ。

他にも効用がある。まず、一切のことは「神の永遠なる決定から生ずる」¹⁴のだから、我々は運命を待ち受け、それに耐えねばならないことを教えてくれる。そして、「何びとをも憎まず、蔑まず、嘲らず、何びとをも怒らず、嫉まぬこと」¹⁵を教えてくれ、現状に満足することと他人に援助すべきことを教えてくれる。さらには、為政者にとって、人民を権力で隷属させるのではなく、自ら進んで統治に従うようにするにはどうすればよいのかを考えさせるように仕向ける。

二．宗忠の神

黒住宗忠の神観を確認するにあたって、まずは「道のことわり」を確認するのが便利であろう。「道のことわり」は明治七、八年ごろに門人の星島良平によって著された『教祖宗忠神御小伝』に現れる¹⁶。

凡そ天地の間に万物生々する其の元は皆天照大神なり。是れ万物の親神にて、其の御陽気天地に遍満り、一切万物、光明温暖の中に生々養育せられて息む時なし、実に難有き事なり。

天照太神は無論、日本神話上、高天原を主宰する皇祖神であり、日の女神とされている。しかし、中世までは大日如来と習合するなどし、人格神として崇拝の対象とされてきた。さらに、江戸儒学でも「神とは人也」¹⁷と述べた新井白石に見られるようにエウヘメリズムの観点から神話研究が行われたた

¹⁴ 同上。

¹⁵ 同上。

¹⁶ 村上（一九七七）、三三二ページ。

¹⁷ 新井白石（一七一六）、全集二一九ページ。

め、天照太神は人格神そのものであった。これに対し、本居宣長は天照太神を神話の通り掛値なく日輪として理解すべきだと考えた。黒住教が日拝の宗教であることからわかるように、宗忠にあっても天照太神が天空に照らす太陽であることは第一義的に間違いないことである。しかし、「道のことわり」の冒頭を読んでも、単なる自然物としての太陽を離れて、万物を生成化育する普遍的な絶対神として相当程度に昇華されていることは明瞭なのである。

宗忠は多くの歌を詠んだ人である。『黒住教教書・歌集』などにまとめられた宗忠の歌のなかにも、神概念を探ることのできるものが少なくない。

天照す神の御はらに住人は寝ても覚めてもおもしろきかな¹⁸
天地は広き物かと思ひしに我一心の中に有りける¹⁹
天照す神の御心我こゝろ隔てなきこそ難有きかな²⁰
天地のたつた一つのいきものを我身のうへと思ふうれしさ²¹

なかでも歌 は最も明瞭に宗忠の汎神論的神観を表している。我々は天照太神の腹の中に住んでいるということは、天照太神がこの世全体を包含する神であるということに他ならない。万物は天照太神のなかで生成し、万象は天照太神のなかで生起する。そして、その天照太神と我々人間の心は隔てのない一つのものであることが、歌 によって示されている。我々の心は天照太神が我々の内で考えているということでもある。そのことから歌 の境地在導かれる。天地自然は天照太神そのものの身体である。そして、その天照太神の思惟は天地自然の存在と一致しているはずであろう。歌 で見たよう

¹⁸ 村上前掲書、八ページ。

¹⁹ 同上、三ページ。

²⁰ 同上、五〇ページ。

²¹ 同上、五一ページ。

に、天照太神の思惟は我々の心と同じものであるから、天地自然は皆我々の心の内に存在していると言ってよい。

歌には「いきもの」という言葉が現れる。漢字で書けば「活物」である。この語の表すものもまた、黒住教では極めて重視される概念に他ならない。「道のことわり」でも次のように語られる²²。

誠を取外すな。天に任せよ。我を離れよ。陽気に成れ。活物をつかまへよ。古の心も形なし。今の心も形なし。心のみにして形を忘るる時は、今も神代、^{じんたい}神代今日、今日神代。世の中の事は心程づつの事なり。心が神に成れば即ち神なり。

全体としては、心が神と一つになることによって、自らが神となることを言っているのだが、そのなかに「活物をつかまへよ」と出てくるわけである。実は黒住宗忠がこの用語をどこから持ってきたか詳細にはわからないが、その分人口に膾炙していたと言っていいかもしれない。古くは古義学の伊藤仁斎が天地の森羅万象を「活物」と表現し、古文辞学の荻生徂徠がそれを評価して概念的に継承した。徂徠は自然だけでなく人世もまた「活物」とであるというふうに語を使っている。黒住宗忠の場合、そうした千変万化する大自然を生命力の満ち溢れた世界として捉え、天照太神そのもの、あるいは、その神威の表現として「活物」と言っていると考えられる。だから、「活物をつかまへよ」は、大自然の生命力を体感し、それと自らを一致させるということになる。

黒住宗忠が弟子や信徒に送った書簡は『黒住教教書・文集』としてまとめられている。このなかにも「活物」はたびたび現れる。いずれも石尾乾介宛書簡であるが、まず「其はけは、日月天照大神様、又は仏などを死物と心得

²² 同上、三三三ページ。

候ゆへに、彼のかげの命をよしみ、本体の生物^{いきもの}斗りの心をころす也²³と述べられる。天地自然の生命を指す神仏を何か一定不変の事物と捉えることは誤りであり、千変万化する生命力として捉えよというのである。

さらに、別書簡では「誠に常に承知仕りながら、我物と思ひ、天より生付けられし生物をいため、広大成る不生ふめつの楽しみを失し、世の憐れさ、かぎりなきをしき事成²⁴とある。ここでの「生物」は変転してやまない人の心を直接には指しているが、あえてそう言うからには、天照太神と本来一体である心という意味であるのだから、痛めることなく大事にせよという話になっているわけである。

また、書簡であるが、「しかし、先達て、是斗りは未だ不申上候得共、無を少しはなれ候事も御座候て、姿をはなれて生物の処、我心だけは勤めさへ候得ば、相違無御座天の恵みを請け申し候。」²⁵と宗忠は書く。「無」を宗忠は、万有の根源であってそれ自体は何にも拠ることなく存在している天照太神の意味で用いることがある。だから、この文の解釈は、天照太神の御心を少し離れることがあったが、肉体的なことを離れて「活物」である心へ戻り、天照太神と一体である我が心を見つめることに努めさえすれば、間違いなく神の恵みが受けられるだろう、ということになる。これらのことを考え合わせると、歌でたった一つの「活物」と言われるのは、生成変化する大自然の生命力である天照太神のことであり、それと一体化した自分自身の心であると理解されるのである。

さて、天照太神が天地自然と一体であることは、やはり、書簡のなかで宗忠が用いている表現から明瞭に推し量ることが可能である。たとえば、「乍^{おそれながら}、御自身を御自身と不思召、天地の物とおもひ給はゞ、ただ難有のみに相

²³ 同上、七三ページ。

²⁴ 同上、七九ページ。

²⁵ 同上、一〇〇ページ。

成り可申候²⁶とある。ここでは、天照太神のことを天地と呼んでいると理解していただろう。また、「何事も自然に御任せ可被成候²⁷というときも、宗忠の筆であれば、自然の語で天照太神を指していると考えるのが素直である。

三．永遠の生命と陽気ということ

我々はなぜ生きようとするのであろうか。スピノザによれば、「おのおの物は自己の及ぶかぎり自己の有に固執するように努める²⁸という定理を導くことができる。証明は以下のとおりである。「個物は神の属性をある一定の仕方では表現する様態である²⁹。それは個物が神の一部ということだから、個物は自分のなかに自分の存在を除去するようなものを有していないはずである。自分の存在を除去するようなものは、あるとすれば、自分の外部になるのであり、自分は自分の存在を除去する要因を内に持たないのだから、外部からそれが来たときは抵抗するはずである。

我々人間も、したがって、永遠の生命を求めようとする。だが、そもそも永遠とはなんであったか。スピノザは永遠を次のように定義していた³⁰。

永遠性とは、存在が永遠なるものの定義のみから必然的に出てくると考えられる限り、存在そのもののことと解する。

つまり、真に存在するものはそれ自体永遠である。なぜなら、そのような存在は永遠の真理であるからだ。スピノザが注意しているように、そういう

²⁶ 同上、六八ページ。

²⁷ 同上、二三八ページ。

²⁸ スピノザ前掲書、翻訳上巻一七七ページ。

²⁹ 同上。

³⁰ 同上、三八ページ。

意味での永遠は「持続や時間によっては説明されえない」³¹。言い換えれば、永遠は無限に続く時間という意味ではないのである。これは、今ここに我々が現に存在しているという意味で既に永遠性を有しているという言明であると言っている。この一瞬のうちに永遠性が顕現している。

そうは言っても、現実には我々人間は死亡し、肉体的にも精神的も滅していく。スピノザも書いている。「精神は身体の持続する間だけしか物を表象したり・過去の事柄を想起したりすることができない」³²。既に確認したように、精神はまずは身体の観念であった。だから、身体が存続する間しか自己の身体や周辺の事物を知覚することができない。つまり、精神は身体の消滅とともに対象を失って思惟を継続できない。それは精神もまた存在しなくなることを意味する。しかし、とスピノザは続ける。「神の中にはこのまたかの人間身体の本質を永遠の相のもとに表現する観念が必然的に存する」³³。神は言うまでもなく個々の人間身体の原因であり本質である。ということは、神が永遠である以上、人間身体の本質もまた永遠であるということになる。したがって、個々の人間身体の本質を永遠の相の下に観念することが可能だというのである。だから、気を付けなくてはならない。スピノザが言っているのは人間の本質存在は永遠だということであって、現実存在が失われていくことは当然なのである。

それでも、そこまで言った上で、スピノザは魂の永遠性について驚くべき言明を行う。「人間精神は身体とともに完全には破壊されえずに、その中の永遠なるあるものが残存する」³⁴。なぜ、そのようなことが言えるのだろうか。我々の個々の精神もまた、神が我々の内で思索していると考えられるので

³¹ 同上。

³² スピノザ前掲書、翻訳下巻一一九ページ。

³³ 同上、一二〇ページ。

³⁴ 同上。

あった。つまり、我々の精神は神の思惟の一つの様態であるということである。だから、我々の身体が現に消滅して、意識という意味での我々の精神が消滅したとしても、思惟の主体であった「永遠なるあるもの」、すなわち、神は残るのである。

我々人間の精神にあって最も神に近いのは知性の部分である。だから、知性は永遠に存続するが、スピノザが表象力と呼ぶ部分は身体の死とともに消滅する。スピノザは人間の精神にあって知性が最も能動的なものであるのに対して、表象力が最も受動的であるとしている。人間の知性が神の思惟と一体化していくプロセスについて、スピノザは次のように描写している³⁵。

我々の精神は物を知性的に認識する限り思惟の永遠なる様態であり、これは思惟の他の永遠なる様態によって決定され、後者はさらに他のものによって決定され、こうして無限に進み、このようにしてこれらすべての様態は合して神の永遠・無限なる知性を構成するということが分かるのである。

神の知性が完全で無限定なものであるのに対して、人間の知性は部分的である。それは範囲や正確さを何かによって画されていることを意味する。つまり、人間知性は他の人間知性との相対的關係においてしか存在しない。だが、個々の人間知性の不完全さは統合されて補い合うことによって神の知性へと無限に近づいていくことだろう。このように、人間の心が神の心へと合していくという理は、黒住宗忠が「生き通しなり」という言葉で表現したものと同じであると考えられる。

³⁵ 同上、一三五ページ。

天照す神の御心人心一つになれば生き通しなり³⁶
 天照す神の宮居に住人は限り知られぬ命なるらん³⁷
 難有又面白おもしろきうれしき嬉敷と思ふ心そ生通しなり³⁸
 天地とともに廻りし心こそ限りしられぬ命成らん³⁹
 天地の開けしときに生れ来て限りしられぬ命なるらん⁴⁰
 天地の誠の道を知りぬれば日月と共に生通しなり⁴¹

このように、宗忠は歌、
、
のように「生き通しなり」を用いたり、
歌、
、
のように「限りなき命」を用いたりしているが、意味するところは天照太神と一体となって永遠の生命を生き続けるということである。そのとき、「面白い」、「嬉しい」という陽気の感情が生じる。この意味でこれらの感情は神と一体化したことの証であり、それ自体が神からの恩寵ということなのである。「道のことわり」にも次のように述べられる⁴²。

形の事を忘れ、日神の日々の御心に任せ、見るも聞くも一々味はひ、
 昼夜難有いと嬉しいとに心を寄せ、御陽気をいたゞきて下腹に納め、
 天地と共に気を養い、面白く楽しく、心にたるみ無きように、一心が活
 けると人も生きるなり。生きるが大神の道、面白きが大神の御心なり。教
 は天より起り、道は自然と天より顕はるるなり。

³⁶ 村上前掲書、七ページ。

³⁷ 同上、八ページ。

³⁸ 同上、五〇ページ。

³⁹ 同上。

⁴⁰ 同上、五三ページ。

⁴¹ 同上、五六ページ。

⁴² 同上、三三三ページ。

陽気は太陽神である天照太神の神徳であることは言うまでもない。それは「活物」の発する生命力であり、天照太神は陽気を妨げる陰気を最も嫌うのである。神との一体化が必然的に陽気という感情、あるいは、至福感をもたらすのはスピノザにおいても一緒である。スピノザはどのようにして至福を論理的に導いているのであろうか。

スピノザの定義では、感情とは「我々の身体の活動能力を増大しあるいは減少し、促進しあるいは阻害する身体の変状、また同時にそうした変状の観念」⁴³である。精神は自己の身体の観念であり、自己の身体の変状を通してのみ自分自身を認識するのであった。だから、精神は自己の身体の変状をより確実に認識できるときにより大きな完全性へと移行できるのである。より大きな完全性への移行こそ、スピノザによる喜びの定義である。そして、スピノザの愛は「外部の原因の観念を伴った喜び」⁴⁴なのである。精神がより大きな完全性へと移行したとする。そして、その認識をもたらした原因が自己の外部にあると知れば、精神は愛を感じるのである。自己の存在の原因は神である。だから、我々は必ず神を愛さずにはいられない⁴⁵。

自己ならびに自己の感情を明瞭判然と認識する者は神を愛する。そして彼は自己ならびに自己の感情を認識することがより多いに従ってそれだけ多く神を愛する。

この難解な定理は、そのようにして理解可能になるのである。そもそも認識ということについて、スピノザは三つの種類があるとしている。第一種のそれは表面的な知覚である。第二種のそれは理性的認識である。だが、スピ

⁴³ スピノザ前掲書、翻訳上巻一六七ページ。

⁴⁴ 同上、二三九ページ。

⁴⁵ 同上、翻訳下巻一一四ページ。

ノザが最も重視するのは第三種の認識であり、これは存在を直感的に把握することである。スピノザにとって「精神の最高の努力および最高の徳は、物を第三種の認識において認識すること」で⁴⁶あり、そこから「存在しうる限りの最高の精神の満足が生じる」⁴⁷のである。ところで、第三種の認識の対象は現実存在であるが、神はこの世の唯一絶対の現実存在である実体そのものであった。だから、第三種の認識とは神を認識するということであり、それが我々に最大の幸福を与えてくれることになる⁴⁸。

以上によって我々の幸福あるいは至福または自由が何に存するかを我々は明瞭に理解する。すなわちそれは神に対する恒常・永遠の愛に、あるいは人間に対する神の愛に存するのである。この愛ないし至福は聖書において名譽グロリアと呼ばれているがそれは不当ではない。なぜなら、この愛は、神に関する人と人間に関するを問わず、まさしく心の満足と呼ばれうるのであり、そして心の満足は実際には名譽と異ならないからである。

この至福は神への愛の報酬ではなく、神への愛そのものであると言えよう。ある種の修証一如が実現している。スピノザ自身も言っている。「至福は徳の報酬ではなくて徳それ自身である」⁴⁹。こうして、『エチカ』が終わっていくのだが、末尾でスピノザは述べている⁵⁰。

⁴⁶ 同上、一二二ページ。

⁴⁷ 同上、一二三ページ。

⁴⁸ 同上、一二九ページ。

⁴⁹ 同上、一三六ページ。

⁵⁰ 同上、一三七ページ。

これによって、賢者はいかに多くをなしうるか、また賢者は快樂にのみ駆られる無知者よりもいかに優れているかが明らかになる。すなわち無知者は、外部の諸要因からさまざまな仕方であらゆる揺り動かされて決して精神の真の満足を享有しないばかりでなく、その上自己・神および物をほとんど意識せずに生活し、そして彼は働きを受けることをやめるや否や同時にまた存在することをやめる。これに反して賢者は、賢者として見られる限り、ほとんど心を乱されることがなく、自己・神および物のある永遠の必然性によって意識し、決して存在することをやめず、常に精神の真の満足を享有している。

ここには間違いなく、「面白さ」、「嬉しさ」、そして、陽気が満ちているのである。

おわりに

黒住宗忠の神とは何であるのかを知るために、スピノザを手掛かりにして議論を進めてきた。確認できたことは、宗忠の天照太神が徹底して内在神であり、唯一の実体であるこの世とその中の万象の全体であるということだった。そして、その神が持つ性質から、神と人が一体化することによって得られる永遠の生命と至福感が必然的導出されるのだということである。

スピノザが哲学的概念と幾何学的推論を駆使してその諸定理を導いているのに対して、宗忠は大病からの生還の体験を通じてすべてを把握したかに見える。だが、果たしてそうなのだろうか。そこで語られているのは紛れもない宗教的な経験である。だから、宗忠がそれを歌や書簡、説教を通じて言語化していったのは、物の道理がそうした順番だからである。何も無いところから、論理を使って宗教的教説が導けるといえることはありえない。

だから、スピノザについての捉え方が事実とは逆なのである。無神論的としてユダヤ教を破門された彼にもまた神への信仰と宗教体験が紛れもなくあった。スピノザはそれを幾何学的公理体系という形式で表現したに過ぎない。『エチカ』の一行一行が迫力を持って迫ってくる秘密は論理の力ではなく宗教体験の真実性にあると見るべきであろう。

本稿が明らかにしたように、黒住宗忠の神観はスピノザのそれに近い、徹底した汎神論を日本神道にもたらしたのであった。言ってみれば、汎神論は唯一神をどのように合理的に理解し、近代的世界観のなかに位置付けるかという模索の結果である。明治政府の初期に見られた神道国教化政策のなかで、天之御中主神と天照大神を一体化して絶対神と見做す傾向が見られた。もちろん、こうした政策は急激な撤退を余儀なくされたが、その後の日本における急激な近代経済発展の原動力として汎神論的に合理化された神道思想があったかもしれないのである。少なくとも、確かに黒住教の汎神論は教派神道のなかでも異色のものであったし、現代日本人の神観にも隠然たる影響を与えていることは否定できまい。

参考文献

- Spinoza, B. D., *Ethica: Ordine Geometrico Demonstrata*, 1677. (畠中尚志訳『エチカ』全二巻、岩波文庫、一九五一年。)
- 新井白石『古史通』一七一六年。(国書刊行会編『新井白石全集』第三巻、国書刊行会、一九〇六年。)
- 西田幾多郎「場所的論理と宗教的世界観」遺稿、一九四五年。(上田閑照編『西田幾多郎哲学論集 自覚について他四篇』岩波文庫、一九八九年、三九三三九六ページ所収。)
- 村上重良校注『生命のおしえ 民衆宗教の聖典・黒住教』平凡社、一九七七年。